



# 卓 話



## イニシエーションスピーチ

伊賀 静雄会員

本日は私の美術界への転身の道のりをお話したいと思えます。つたない話ですが、しばしお耳をお貸し下さい。宜しくお願い致します。また現役時代のスケート靴と写真を持ってきましたので、ご覧下さい。



人間生きて行くには、色々な試練があり、また色々な人との出会いがありました。私の故郷は北海道の道東の地、釧路です。私は23年間アスリート、スピードスケートの選手をしておりました。子供の頃は、家が酪農家でしたので、学校から帰ると野良仕事の手伝いをしておりました。まだこの頃は世の中が安定していませんでしたが、東京オリンピックが間近という事もあり、著しい経済成長が始まるうとした時期でした。しかしながら、我が家は火の車で、貧しさに耐えていたようです。

中学を卒業する頃、当然仲間と一緒に高校へ進学するものと子供ながらに考えておりましたが、そんなに世の中は甘くありませんでした。団塊世代の最後の方で、「金の卵」と言われてましたが、とにかく東京への集団就職と言われてショックを受け、1965年の春に東京へ旅立ちました。釧路から特急大空で函館まで、函館から青函連絡船で青森へ、青森から特急はつかりで上野へ到着し、ああ、ここが歌に出てくる上野駅なのかと子供心に思ったものです。

就職先は築地の食品問屋（魚屋）でした。ここから私の人生が動き出します。築地の仕事ですから朝がとても早いのです。3時に起きて倉庫に入り、その日に売り出す商品を出すのです。15才ですから毎日眠くて眠くて、ある日寝坊をしてしまい、飛んで行きましたが、既に遅しでワンパンチが飛んできました。そんな毎日の仕事の後に、近くの晴海スケートセンターによく滑りに行っていました。

そこである日突然呼び止められ、「どこのクラブに所属しているのか。貴方のスケATINGなら結構良い所まで行けるよ。高校へ行けばインター杯、国体への道も開けるよ」と言われました。この方は都立高校の冨田玲子先生でした。私は戸惑いながらも北海道の先生に電話で相談しました所、快く賛成してくれ、すぐに内申書と通信簿を送ってくれました。とても勇気が要りましたが、翌年無事に京橋商業定時制高校に入る事が出来き、仕事、学業、スケートへのチャレンジが始まりました。朝3時半起きの仕事、5時半からの学校、6時半からスケートの練習です。16才の私にはきつ過ぎて、体重が減ってしまいました。ある日生徒指導の先生から痩せた理由を聞かれ、お話しすると、そのような生活を続けてたら志半ばで死んでしまうぞと指導され、新しい就職先を紹介してくれました。今度は本屋で、なんと大学までの奨学金を出してくれる会社でした。仕事の始まりが8時半で、学業、スケートに専念する事が出来るようになり、また体力も上がってスケートの記録も伸び、インター杯、国体にも出場出来るようになり、ここまで支えてくれた人達に心から感謝しました。

書店での仕事はセールスで、最寄りの企業や商店へよく行きました。その中に孔雀画廊がありました。ここへは何度も何度もセールスに行き、その結果画廊のオーナーから「君なかなか頑張ってるじゃないか。丁度うちも人を探してる所なんだ。うちに来ないか」と言われました。また新しい決断をせねばならず、勇気を持って書店の太田社長に相談した所、快諾してくれました。

驚いた事に、なんと画廊のオープンが10時です。最初の仕事から比べると、7時間もの違いです。学業にも専念出来、スケートにもますます打ち込む事が出来るようになりました。しかしながら、今度の仕事は徒弟制度の残る、とても厳しい世界でした。美術界は新しさも求めますが、古きをもっと大事にします。

新しい仕事に入り、そこで沢山の人の出会いが始まりました。そんな中、20才の時に高橋政知さんという凄い人と出会いました。私の出会いのベストスリーに入る人です。この方は56才の時に三井不動

産の江戸英雄氏にヘッド・ハンティングされて、浦安の埋立てを成し遂げ、ディズニーランドを立ち上げた方です。丁度この年に画廊で第9回五山会展（東山魁夷・松山寧・山本丘人・高山辰雄・西山英雄）をやっており、作品を買い上げて頂きました。この時の作品の販売に、私の力も結構あったようです。この五山会展は、今までの仕事の中で最も意義のある仕事でし

た。「人間男として生まれたからには、限界までやれ」と高橋さんにはよく言われたものです。

最後になりますが、まさに人生は出会いです。もっと高橋さんの事を、またスケートの現役時代の事もお話したかったのですが、また何かの時にと思います。

本日は有難うございました。